



取材日:平成25年8月9日(金)

取材先:NPO 法人 伊賀の伝丸(三重県伊賀市)

レポーター名:三重大学人文学部法律経済学科4年 山田愛佑美

『世界と伊賀をつなげ、そして人々の心をつなげる

「NPO 法人 伊賀の伝丸」

—設立のきっかけ—

三重県伊賀市にある「NPO 法人 伊賀の伝丸」は、多言語通訳・翻訳を主に行なっている団体である。設立のきっかけとなったのは、代表者である和田京子さんの経験と副代表者である菊山順子さんの経験、そして二人の出会いであった。

和田さんは1992年に夫の仕事の都合でジャカルタ(インドネシア)へ行き、言語、宗教など環境も文化も全く違う場所に身を置くことになり、約二ヶ月間辛い時期を過ごした。しかし、そんな和田さんに優しく声をかけてくれる現地の人と出会ったことで、辛かった生活が一変して楽しい生活になった。1995年にふるさとである伊賀へ戻ることとなるが、そこでインドネシア人をはじめたくさんの外国人がいることに気づき、自身の海外での経験と照らし合わせ、自分のように辛い状況にある外国人に対して、何かできることはないかと和田さんは思ったのである。

一方、菊山さんは、青年海外協力隊に参加し、パラグアイへ行っていた。その後日本に戻るも、一年半後に仕事を辞め、伊賀に戻った際、小学校で外国人クラスを作ろうとしており、教育委員会がスペイン語のできる人を募集していた。菊山さんは、教員免許は持っていなかったが、青年海外協力隊の経験からスペイン語ができたので臨時免許で教師になった。しかしそこで、外国人が一生懸命伝えよう話そうとしても、日本人教師はきちんと受け取ろうとせず、菊山さんのような外国語のわかる人にばかり頼りきってしまう現状を目の当たりにし、辞めることを決意した。それからは「伊賀日本語の会」などで活動していた。

経験は異なっても同じ思いを持っているそんな二人が出会ったのが、中間支援のNPO「ウィリアム・テルズ・アップル」の通訳ボランティアの会合であった。和田さんは簡単な会合だと思っていたが、菊山さんから話を聞き、外国人へのサポートが行き届いていない現状を知り、後に二人で「伊賀の伝丸」の事務所を設立することとなる。

—活動の魅力とは—

「伊賀の伝丸」の素晴らしいところは、外国人を支援する団体ではなく外国人と共に生きていくことを目標にしていると断言しているところであると思う。表現の違いで、内容は同じではないかという印象を受ける方もいると思う。しかし、私は「支援」というと、こちらから一方的に助ける印象を受け、「共生」は、お互いに力をかけあい、双方向に矢印が向き、一緒にがんばっていく印象を受ける。そこには、外国人も日本人も同じ立場で、その土地で仲良く暮らしていこうという思いが感じられる。

実際に、外国人と日本人の交流も以下のように多く行われている。

伊賀市内の住民自治協議会で人権のアンケートを実施し、お茶会で数人グループにわかれ外国人と日本人が近い距離でテーブルトークを行う取り組み

外国人と日本人が共に聞く防災のシンポジウムを行う取り組み

町の人が率先して交流サークルを作り、祭りでパステルというブラジルのお菓子を作り、一緒に販売したこと

このように「伊賀の伝丸」を中心に、伊賀の地域の人、外国人、自治体、を巻き込み、地域を良くしていこうとする取り組みが多く行われている。

—活動への思い—

「伊賀の伝丸」の代表者和田さん、副代表者菊山さんに、活動の原動力について聞いてみると、「辛くても、必死に生きている姿をみて力をもらえる。助けたいという思いよりは、いろいろな人の生き方を見ていきたい思いの方が強い。そして何より、ふるさとである伊賀が好きで、そのまちづくりをしていることがおもしろい」という言葉が聞けた。

二人の心には熱い思いがあり、そしてその思いを思いのまま心にとどまらせてしまうのではなく、きちんと実行するところを私は素晴らしいと思いました。

—取材を通して感じたこと—

今回取材を通して、活動内容や日本にいる外国人について知ることができてよかったですし、またそれ以上に代表者である和田さん、副代表者である菊山さんの熱意を感じることができてとてもよかったです。お二人が、今まで頑張ってきた経験や現在も頑張っているお話を聞いているだけで、私自身ももっと頑張ろうという気持ちになり、元気をいただきました。世界と伊賀をつなげ、そして人々の心をつなげる「NPO 法人 伊賀の伝丸」、そしてその魅力的な活動を支える二人の素敵な女性に出会えたことを嬉しく思いました。そして、より多くに人々に活動や思いを知ってもらいたい、私を感じたように元気を感じてもらいたい、そんな思いを抱きながら、この記事を作成しました。